

# 宮沢賢治文学の意義

## 竹下 数馬

この夏、十年ぶりで宮沢賢治の郷里、岩手県花巻市を訪れた。十年前はちょうど二十三回忌に当る年であった。賢治熱がかなり高まって来た時でもあったし、さわやかな空気を吸いながら文学遺跡めぐりが出来ることは幸いであった。賢治の作った「星めぐりの歌」が毎晩のようにラジオから流れていた。町には「賢治まんじゅう」や「賢治もなか」が現われていた。「賢治の町」という感じがすでにかなり出ていた。有名な「雨ニモマケズ」の詩碑はもちろん出来ていたし、花巻農業高校にも「まことひとびと索むるは……」の詩碑が建っていた。

あれから十年。花巻駅を降りると「詩碑前ユキ」のバスがまず目に入った。詩碑が「雨ニモマケズ」の賢治の詩碑であることは人に問うまでもない。いよいよ町の名所になったなあと今さらながら感慨にふけらざるを得なかった。「賢治こ

けし」「賢治手拭」「賢治のれん」等々まで目につく。花巻の町はもう完全に「賢治の町」である。詩碑・歌碑のたぐいもさらに殖えていることを知った。町の人々の賢治に対する考え方も次第に変化を来したようである。地方で文学活動をする者が受ける誤解や曲解を賢治も受けていた。彼の文学活動は宗教活動でもあり農民運動でもあったのでその困難は普通以上であったであろう。

そういうもろもろのややもやした町の人の感情は現在ではすっかり影をひそめ逆に賢治崇拜・賢治信仰という気持ちに移行しているようであった。

「雨ニモマケズ」の詩碑は、いわゆる一般の文学碑とは異なりその下に賢治の遺骨・遺髪の一部が埋められているとかいうことで賢治文学遺跡巡礼のメッカともなっている。ここは北上川を望む高台で彼が晩年（といっても三十八才の若さ

で死んだ彼であつたが、罹須地人協会なるものを起して農民運動、芸術活動をした思い出の最も深いところであつたと考えられる地で一種独得の崇高な感じが与えられる。

さて、この碑の前で毎年行なわれる碑前祭は九月二十一日の命日の前夜、彼を慕う老若男女によって盛大にとり行なわれる由で年々その数を増してゆくといふことである。「雨ニモマケズ」の詩はあまりにも有名であるが、その他の童話にしても小学生達にも親しまれてゐるわけで、すでに花巻の年中行事の一つともなつてゐる。

生前、まつたくの無名の存在であつた賢治の名が死後、年を追つて人々に知れわたるようになり、しかも一種の信仰的な対象となりつつあるといふのはどういふことであらうか。

明治以後の文学者は漱石にしても鷗外にしても文豪の名をほしいままにしており、その研究者の数も多い。しかし心からの敬愛の念でもって慕われ親しまれてゐる文学者が賢治以外にそれほどあるとは考えられない。『漱石まんじゅう』や『鷗外もなか』が出来てゐるかどうかは知られないが、その人柄とその作品にして多くの人々に愛され親しまれるといふことは、つまりは価値の問題にも帰着するであらうか。文学作品の価値ないしは文学史上の地位といふような問題は簡単には決められないが、その作家なり作品なりがどのように入らぬかによつて受け入れられたかによつても決まるのではなから

うか。そして、それは単に作家が生きていた時代のことだけではなく、没後の様子によつても決められるのではあるまいか。つまり、歴史といふものが決めてくれると言つてよいかも知れない。

こういうことを考えながら宮沢賢治の文学を見てゆくと日本の近代文学史のみならず日本文学全体の歩みから見ても、じつにユニークな存在であることだけはたしかである。

賢治は死後まだ三十年しかたつていないし同郷の啄木ほど大衆的でもないため、まだ歴史的存在となつていないといふ感じがをいだかせる。啄木ほど古典的存在になつていないといふ意図でもある。賢治のいわゆる四次元の文学は今なお新しいし未来の問題をも沢山にふくんでゐる。こういう新鮮な感覚なり問題なりをふくんだ文学こそ、ある意味では古典の名に値すると言ふべきであらう。かつて高村光太郎は、ゲーテの詩がドイツ語のディヒテルの名に値するならば、日本では賢治の詩がそれに相当する、といふようなことを述べたことがあつたが、万葉集が古典の名に値するとするならば近代文学においては賢治の作品こそ古典と称するに足るものであると言えよう。

日本の近代文学は、ある意味では迷ひの文学であり不安の文学である。明治維新以後、約百年、西欧思想の波に洗われ

つづけていまだに安定を得てない。日本人による、日本的な文学はまだほとんど現われていないと言った方がよからう。賢治が西欧思想の影響を受けていないというのではない。いま、近代科学その他、賢治ほど近代的な学問を身につけた文学者は数少ないかも知れない。にもかかわらず、彼の文学に眞の安定感がそなわり、古典の名に値する作品となり得た

のは何が故であろうか。それは宇宙をつらぬる透明な意志を身につけ、法華経精神に基づく四次元世界の文学を近代日本文学においてはじめて現出させることに成功したからに外ならないであろう。この点にこそ宮沢賢治文学の意義を認めるべきではあるまいか。

# 行為と迷い

——宮沢賢治原論メモ——

原 子 朗

宮沢賢治が死んでから早くも三十年を過ぎたわけだが（昭和八年歿）、賢治への関心は、こんにち漸く一般にもおよんで来たと言えるようだ。「関心」と言っても、実態はさまざまだから、少くとも、宮沢賢治という名まえを知らない人が少なくなってきた。そして彼がどんな人間だったかを漠然とながら知っている人が多くなってきた——という意味において、つまり「関心」の底辺が広がって来たということであ

る。なまじ底辺が広いと、かえって対象の本質はぼかされ、孤独になってゆく、ということもあるし、「底辺」などまるで持たない、すぐれた存在も少なくないことだから、関心の広さと、その対象の眞価とは、本質的に無関係なのだが、それにしても死者が、年とともにひろくその名を呼ばれてくるという例は稀有のことである。おそらく、賢治への関心は、まだこれからいちだんとたかまってゆくだろう。